

インプラントを用いた欠損補綴歯科治療の展開

横山 敦郎^a, 山根 進^b

Development of Prosthodontic Treatments for Missing Teeth Using Dental Implants

Atsuro Yokoyama, DDS, PhD^a and Susumu Yamane, DDS, PhD^b

オッセオインテグレーションの概念に基づくインプラントが歯科臨床に応用され、すでに 40 年以上が経過している。初期においては、その適応は無歯顎に限られていたが、新たな材料や技術の開発、手術方法の改良等によって、インプラント治療の適応範囲は、部分欠損から単独歯欠損、顎欠損に至るまで拡大している。補綴装置についても、初期のボーンアンカーブリッジから、クラウン、ブリッジ、オーバーデンチャー、さらには審美的修復や CAD/CAM の応用へと発展している。加えて、抜歯即時埋入や埋入即時負荷といったオッセオインテグレーションの概念が確立された当初には考えられなかった治療方法についてもインプラント補綴臨床に応用されつつある。

補綴主導型インプラント治療の概念がインプラント治療に導入され、機能回復や長期予後などについてのエビデンスに基づく多くの良好な結果が数多く報告されている。このように現在では、インプラント治療は、ブリッジや可撤性義歯と同じく、欠損歯列に対する補綴方法の一選択肢として、歯科医師側からも患者側からも高い評価がなされ、広く普及しつつある。しかし、良好な予後とともに、合併症等の問題についても報告がなされ、今後インプラントを用いた欠損補綴歯科治療をさらに発展させていくためには、明らかにしていかなければならない問題も残っている。

本セッションでは、インプラントを用いた欠損補綴歯科治療の展開について、臨床家として最前線でご活躍されるとともに、大学において臨床教授の立場で教育ならびに臨床研修に携わっておられる 3 名の先生に、臨床例をご提示していただくとともに、ご専門とされる領域についてのご講演をお願いした。飯島俊一先生（東京歯科大学臨床教授）には、インプラント周囲炎、上部構造の破折、上部構造の固定および歯肉の退縮等のインプラント治療の合併症の原因とその改善方法について、日高豊彦先生（鶴見大学診療教授）には、審美的修復に関するインプラント周囲組織、インプラントの埋入位置ならびにインプラントから補綴物への移行形態について、上田秀朗先生（福岡歯科大学臨床教授）には、咬合再構成における欠損補綴処置を効果的に行うためのインプラント治療を含めた欠損補綴方法の選択基準について、本項にまとめていただいた。

本項が、会員の皆様の臨床、特にインプラントを用いた補綴治療に役立つことを座長として確信している。

著者連絡先：横山 敦郎

〒060-8586

北海道札幌市北区北 13 条西 7 丁目

Tel: 011-706-4268

Fax: 011-706-4903

E-mail: yokoyama@den.hokudai.ac.jp

^a 北海道大学大学院歯学研究科口腔機能補綴学教室

^b 九州大学歯学部臨床教授／山根歯科医院

^a Department of Oral Functional Prosthodontics Graduate School of Dental Medicine Hokkaido University

^b Clinical Professor, Faculty of Dental Science Kyushu University/Yamane Dental Clinic